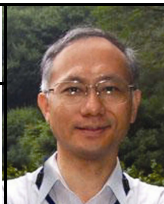


タイトル 元気高齢者の認知機能・作業能力の評価					
分野		キーワード	① 高齢者	② 認知機能、作業能力	
医療・福祉					
研究者氏名: 川口 英夫 (所属: 生命科学部生命科学科)		[お問い合わせ先] TEL: 0276-82-9021 メールアドレス: hkawaguchi@toyo.jp			

【概要】 近い将来、高齢者になっても働き続けなければならない社会が来ると予想されます。この時、ある程度認知機能が低下した元気高齢者が、周囲と摩擦なく仕事ができる職場環境が必要となります。そこで実際に元気高齢者に軽作業をしていただき、どの程度自分の予想と現実との間にずれがあるか、仕事でどの程度時間が自分の感覚とずれているか、文章の作成にどの程度時間がかかるか等を定量的に把握することとしました。

【研究内容】

本研究では、元気高齢者の認知機能と作業能力の定量的評価を目指しました。そこで、元気高齢者 5 名(60 歳 3 名(男性 1・女性 2)、76 歳 1 名(女性)、80 歳 1 名(男性))に一日の作業時間の計画を立てていただき、終了後それぞれの作業時間、真の時間および作業量を計測しました。計画した作業時間と終了後自己申告した作業時間とのずれを主観的ずれとし「プランニング能力」を、終了後自己申告した作業時間と真の時間とのずれを客観的ずれとし「時間感覚能力」を、作業量から「作業能力」を評価しました。その結果、主観的ずれ、客観的ずれから評価した「プランニング能力」「時間感覚能力」は 60 歳と比べ 76,80 歳群は有意に低下しました。また作業量で評価した「作業能力」も 60 歳と比べ 76,80 歳群は有意に低下しました。

以上より、元気高齢者は 70 歳代以上になると、認知機能・作業能力ともに衰えることが定量的に評価できました。このことから、高齢者になっても働くために、一定時間前のアラームやデジタルメモといった補助ツールを用いた支援が有効と考えられます。

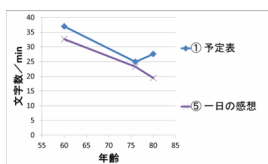


図 1. 主観的ずれと年齢の関係

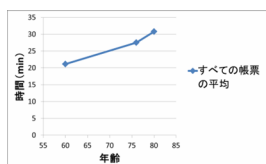


図 2. 客観的ずれと年齢の関係

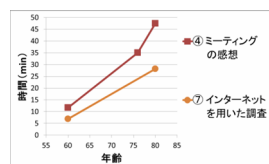


図 3. 作業量と年齢の関係

【実用化・活用が見込まれる分野・対象業種等】 高齢者の就労支援、介護支援

【関連特許】 なし 【関連文献】 石崎、武長、中邑、川口、可視化情報、32(S1)、305-306 (2012)

【備考】 本研究は(独)科学技術振興機構・戦略的イノベーション創出推進プログラムの支援を受け実施された。